

日本精機

# 技能者不足解消は教育で

## ものづくりの要点は「技」にあり

慢性的な人手不足により、外国人労働者に頼る企業が増える中、日本人溶接士を鍛え上げることに注力し、溶接士が必ず必要となるプラント事業を担う企業がある。秋田市に本社を置く、日本精機(石塚広行社長)だ。外国人技能者を雇用することで成功する例がある一方、日本弁護士連合会が2月26日、法務大臣、厚生労働大臣、出入国在留管理庁長官に対して、外国人技能実習生が在留資格を取得するまでの期間、生存権を侵害しないための措置をとるよう勧告するなど、多くの課題も指摘されている。日本精機の相原幸夫生産本部長に「日本人溶接士へのこだわり」について聞いた。



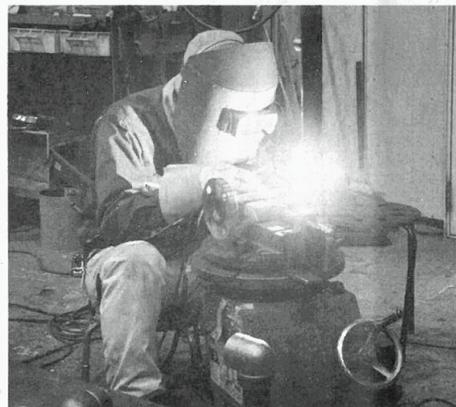
相原本部長

特に9、12月に集中的に溶接を教えるようになった。1982年に日本精機に入社してから38年間溶接を仕事にしてきたが、培った技術を人に教えるのは体得する以上に難しく、ものづくりに興味を持ってもらうことの大切さを、日々痛感している。

近年、工業高校や専門学校に溶接の講師として足を運んでいるため、その教え子が日本精機に入社するという形で新人技能者を獲得できるようになった。最初は年に数回だった講師の依頼も現在では、県内5校に増え、

当社の外国人技能実習制度を知らないわけではないが、秋田県には

手にかけているプラント事業は溶接難易度が高いこともあり、厚生労働省から「ものづくりマイスター」として認定されている技能者が電気溶接・機械加工の分野で3人選出され、講師として教育に携わっている。



溶接作業を担うのは日本人溶接士

溶接士に関わらず技能者不足は大きな課題の一つで、中でも秋田県は県内の人口が減少を続けている。今こそ溶接士の教育に関する依頼が絶えないが、他県と比べて、溶接士を教育するところから

参入しないと技能者が不足するという問題が早くに出た。

日頃、技能者不足は外国人雇用で補うとよく耳にする。国内の外国人労働者は例年10%以上の増加を続けており、就労外国人・日本企業の双方が満足できる雇用関係かと言えば課題は多くある。解決をあてがうことではな

策として女性の雇用やロボット化を進める企業も多いがある種の違和感を覚えることもある。

ものづくりの根幹は技。技を開発することはロボットにはできない。プラントは造形が立地に左右されるため、全てが1点物だ。顧客の希望に対して、どの金属をどのよう溶接するかを考えていくことは技能者にしかできない。

本来ものづくりとは、外国人や、女性労働者を雇用して一定数をあてがうことではな



大型製品の組上げ作業を行う工場

く、何をつくりたいのかを考えぬくことだ。ものづくりを支えてきたのは、人数ではなく、日々の業務から磨き抜かれた技。若手技能者が自分の技術に自信を持ち、多くの溶接士が誇りを持てるものづくりを続けたい。